



Title	歴史書としての聖者伝：16-18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』
Author(s)	澤田, 稔
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 1-22
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.1
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/88355">http://hdl.handle.net/2115/88355</a>
Type	article
File Information	JB014_001sawada.pdf



[Instructions for use](#)

## 歴史書としての聖者伝

—16～18世紀カシュガル・ホージャ家の伝記『タズキラ・イ・ホージャガーン』<sup>(1)</sup>—

澤田 稔

## はじめに

カシュガル・ホージャ家というのは、師匠や先生の意味をもつ「ホージャ」という称号で呼ばれたスーフィー(イスラーム神秘主義者)の血族である。彼らの先祖でマフドゥーミ・アーザム(「偉大なる尊師」)の敬称で知られるアフマド・カーサーニー(1542年没)は、西トルキスタンにおいてナクシュバンディー教団の道統(スィルスィラ)の継承者、教義の理論家として権威をもち、世俗君主からの保護も得て勢威を誇った。そして、その子孫の一部は16世紀後半以降、東トルキスタン(タリム盆地)に進出し、そこで大きな宗教勢力を築くことに成功した。我々はそのマフドゥーミ・アーザムの子孫を「カシュガル・ホージャ家」[佐口1971: 64-70]とか「マフドゥームザーダ達」(Makhdūmzādas) [Fletcher 1978: 87-90]などの呼称で一括している。ただし、カシュガル・ホージャ家は進出当初から二つの家系に分かれており、それぞれ独自の活動を行っていた。そして彼らは、チンギス・ハーンの二男チャガタイの末裔でトルコ化、イスラーム化した君主(ハーン)の建てたモグール国や、西モンゴル系オイラト族のジューンガル王国の統治、支配のもとで活動し、地域社会の政治的動向にも深く関わった。

著述家ムハンマド・サーディク・カシュガリー(Muhammad Šādiq Kāshqarī)は18世紀後半、カシュガル・ホージャ家の歴代指導者の行状を中心として『タズキラ・イ・ホージャガーン(ホージャたちの伝記)』(*Tadhkira-i khwājagān / Tadhkira-i khōjagān*)という書物を中央アジアのトルコ系文語であるチャガタイ語で書き上げ、同時代の記録は無論のこと、後世の史書も伝えていない貴重な情報を残した。チャガタイ語聖者伝に通暁する濱田正美氏によれば、東トルキスタンの聖者伝はほぼ例外なく、聖者の名を付けて誰そのタズキラと題されている

(1) 本稿は、2017年度日本中央アジア学会年次大会(2018年3月24日)において講演した内容を部分的に修正、加筆して文章化したものである。講演会においてコメントの小沼孝博氏と秋山徹氏、司会の宇山智彦氏をはじめ参加者の方々から貴重なご意見をいただいたことに感謝する。ただし、必ずしもそのご意見のすべてを本稿に反映できたわけではないことを予めお断りしておきたい。

が、全くの空想の産物としての聖者伝と神秘主義的世界観に基づく事件史としての聖者伝という二つの極端な違いのタイプ、そしてその両極端の中間に位置するタイプがあるという〔濱田2006:9,11〕。そのなかで、本書『タズキラ・イ・ホージャガーン』は「いわば真正の歴史記述により近い作品」〔濱田2006:10〕なのである。

本稿では、東トルキスタンの聖者伝のなかで、事件史としての聖者伝、つまり歴史書としての聖者伝の代表と言える『タズキラ・イ・ホージャガーン』が伝える政治的側面の情報を紹介し、この伝記においてホージャたちの宗教的な活動や奇跡的なエピソードよりも具体的な政治的事柄に主眼が注がれている理由を考えてみたい。

## 1. 地域と時代背景

『タズキラ・イ・ホージャガーン』で叙述される主要な地域は、中央アジア東部の天山山脈以南のオアシス農耕地域であるタリム盆地の西半部、すなわちアクス、ホタンより西側、カシュガル、ヤルカンドにいたる広大な地域である。16世紀初頭から18世紀半ばにかけてタリム盆地を統治、あるいは支配した国家は二つあった。すなわち、モグール国とジュンガル王国である。

チンギス・ハーンの第二子チャガタイの子孫が君主となり、天山山脈以北の遊牧地域からタリム盆地にかけて統治したモグーリスタン・ハーン国(東チャガタイ・ハーン国)が15世紀末から解体していくなかで、天山山脈以北の草原地域もオイラト、カザフ、クルグズなど新興の遊牧民に奪われたが、1514年にそのハーン家のサイドがタリム盆地西部に進出して政権を樹立した。そして、サイド・ハーン以後、その子孫たちがヤルカンドを拠点にハーン国の版図、領域を東方のトゥルファン、ハミ方面にまで広げることになる。なお、この国家はカシュガル・ハーン国またはヤルカンド・ハーン国と通常名付けられているが、17世紀後半に書かれたこのハーン国の歴史書には「モグール国」(mamlakat-i Moghūliyya)〔Akimushkin 1976: Persian text, 101〕という表現が見られ、ロシア、ソ連の研究者はモグーリヤないしモゴール国の名を用いているので、本稿ではモグール国と呼称する。

17世紀の後半になると、天山山脈北方の遊牧地域に、西モンゴル系オイラト族のジュンガル王国が勢いを増してきて、ガルダン・ボショクト・ハーンの治世からはイリを拠点に大帝国になっていく。なお、イリという地名は『タズキラ・イ・ホージャガーン』では、他のイスラーム史料に見られるようにイラと表記されている。先にハミ、トゥルファンを占領したガルダンは、1680年にカシュガル、ヤルカンドを攻略してタリム盆地の全域を支配下におき、その結果モグール国は実質的に滅亡することになる。なお、『タズキラ・イ・ホージャガーン』において、ジュンガル王国あるいはオイラト族のことはカルマクと呼ばれている。

そしてこの頃から、ジュンガル王国の宗主権下でカシュガル・ホージャ家がヤルカンドを中心にタリム盆地西半部を統治することになる。そして、『タズキラ・イ・ホージャガーン』の叙述の大部分はこの時代のことを扱う。

ところで、『タズキラ・イ・ホージャガーン』には事件が起きた年などの年代は記されていないので、モグール国やジュンガル王国などの政治的動向が年代決定に役立つ<sup>(2)</sup>。ガルダン以後、勢威をふるったジュンガル王国も、1745年に君主のガルダンツェリンが死去した後、君主の位をめぐり内紛が生じる。その内紛の果て、1754年に王族のアムルサナーが清朝に投降し、乾隆帝に援助を求めた結果、翌年に乾隆帝はイリに向けて軍隊を送り、ジュンガル王国を滅ぼす。しかし、アムルサナーは望む形での君主の位を認められず、清朝に叛旗をひるがえした。

一方ジュンガル王国が滅びた結果、その支配から解放されたカシュガル・ホージャ家は、二つの党派がそれぞれ独自の行動をとり、アーファーク派は清朝軍の援助を受け、イスハーク派からカシュガル、ヤルカンドを奪取する。『タズキラ・イ・ホージャガーン』は、アーファーク派の軍勢にヤルカンド郊外にまで追われて捕らえられるイスハーク派ホージャたちの悲劇的な結末で叙述を終えている<sup>(3)</sup>。

その後、清軍は1757年、再びイリに進撃し、アムルサナーはシベリアへ逃げて病没する。その2年後、清軍はタリム盆地全域を平定し、アーファーク派のブルハーン・アッディーン、ホージャ・ジャハーン兄弟が逃亡先のパミールで殺害された。その結果、名実共に清朝による新疆統治が開始される。

## 2. 『タズキラ・イ・ホージャガーン』についての基本的事項

### (1) 著者ムハンマド・サーディク・カシュガリー

著者のムハンマド・サーディク・カシュガリーはその名からカシュガル出身者、ないし同地と関係の深い人物と思われるが、生没年やその生まれ育った環境や経歴は明らかではない。しかし、彼は本書以外に著作物を残しており、その内容から彼の著述家としての関心と力量をうかがうことができる。16世紀半ばにムハンマド・ハイダルによりペルシア語で書かれたモグーリスタン・ハーン国の歴史書 *Ta'rikh-i Rashīdī* (『ラシードの歴史』) をチャガタイ語に翻訳していることから、この地域の歴史に関心をいただいていたことが分かる。さらに、

(2) 本稿においてモグール国とジュンガル王国の君主の在位年、没年や事件などの年代については、おおむね [濱田 1998; 若松 1971] の記述に基づいている。

(3) このイスハーク派勢力の最終的敗退は、1755年の終わりか1756年の初頭と考えられる [佐口 1948: 7; 佐口 1963: 45]。

*Zubdat al-masā'il wa al-'aqā'id* (『課題と信条の精髓』、チャガタイ語)ではイスラームの教義や法学に関する諸説をまとめ、*Ādāb al-ṣāliḥin* (『敬虔な者たちの礼儀』、チャガタイ語)では具体的な道徳を概論として説明している<sup>(4)</sup>。この二つの作品は彼のイスラーム学者としての資質の高さを示している<sup>(5)</sup>。

ムハンマド・サーディク・カシュガリーが活動した年代と地域は、その著作物の序文に記された後援者ないし作成依頼者の経歴からおおよそのことが判明する。『タズキラ・イ・ホージャガン』と『課題と信条の精髓』それぞれの序文において、カシュガルのハーキム(都市長官または行政長官)であるウスマーン・ベグ(‘Uthmān Beg) / ミールザー・ウスマーン・ベグ(Mīrzā ‘Uthmān Beg)が、後援者または作成依頼者として称賛されている[澤田 2014: 63; Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī 1314 [1897]: 4-6]。なお、ウスマーンがカシュガルのハーキム(ハーキム・ベグ)に在任した期間は1778年から1788年までである[河野 2013: 31]<sup>(6)</sup>。

さらに、ムハンマド・サーディク・カシュガリーは『ラシードの歴史』チャガタイ語訳の序文において、*Ta'riḥ-i Ṭabarī* (『タバリー史』)<sup>(7)</sup>をテュルク文(Türki) [すなわち、チャガタイ語——澤田補足]で記述したことを述べた後、エミン・ホージャ・ワン・ベグリク(Emīn Khwāja Wāng Beglik)の息子イスカンドル・ワン・ハーキム・ベグリク(Iskandar Wāng Ḥākim Beglik)が、息子のユースス・タージー・ベグリク(Yūnus Tājī Beglik)とともに「ひとつの榮譽の座とひとつの王権の座」の上に坐り、ムハンマド・サーディク・カシュガリーに語り掛けたという言葉を書いている。その言葉のなかに、「この『タバリー史』を我々の命令により、そなたはテュルク文に翻訳した」とあるので、イスカンドルまたはユースス、あるいはこの父子両者の命令により、ムハンマド・サーディク・カシュガリーが『タバリー史』をテュルク語に翻訳したことが分かる。そして、ペルシア文の『ラシードの歴史』をカシュガルで広く使用されているテュルク語に直すならば、庶民が容易に理解でき、「永遠に我々

(4) *Zubdat al-masā'il wa al-'aqā'id* の写本テキストは [Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī 1314 [1897]: 2-219]、*Ādāb al-ṣāliḥin* の写本テキストは [Muḥammad Ṣādiq Kāshgharī 1314 [1897]: 221-285] に収められている。この二つの作品については、[Hofman 1969: 23-24] [Thum 2018: 21-22] も参照されたい。*Ādāb al-ṣāliḥin* はムガル朝インドの学者アブド・アルハック・ディフラヴィーによる同名作品の翻訳のようである。

(5) 1903年にムッラー・ムーサーによって書かれた *Ta'riḥ-i Amniyya* によると、カシュガルにおいてマウラーナー・ムハンマド・サーディク Mawlānā Muḥammad Ṣādiq が *Zubdat al-masā'il* という名の書物を、ミールザー・ハディー・ペイセ・ベギム Mīrzā Hadī Beisā Begim の息子ウスマーン・ペイセ・ベギム ‘Uthmān Beisā Begim の名に捧げて編んだという [Mullā Mūsā Sayrāmī: 14b]。ここでムハンマド・サーディク・カシュガリーはマウラーナーの称号が付けられており、優れた宗教学者であることを示しているように思われる。

(6) ウスマーンがカシュガルのハーキム職に就いていた時期の事件について『ターリーヒ・ラシディー』テュルク語訳附編に記述があり、新永康氏により訳注がなされている [ジャリロフほか 2008: 171-173]。

(7) アッバース朝時代の著名な学者タバリー (923年没)の浩瀚な歴史書『諸使徒と諸王の歴史』(アラビア語)からではなく、10世紀後半のサーマーン朝宰相バルामीによるペルシア語抄訳本 (Bal'amī, *Ta'riḥ-i Ṭabarī*) から翻訳したものと思われる。そのペルシア語抄訳本については、[本田 1984: 622; Dunlop 1986: 984-985] 参照。

とそなたの名前から名声はなくならず、すべての者が良き祈禱をなすはずだ」と語られている [Muhammad Šādiq Kāshgharī, *Ta'riḫ-i Rashīdī Tarjamasī*, C569: 7-9]。つまり、ムハンマド・サーディクはイスカンドルまたはユヌス、あるいはこの父子両者の命令ないし依頼に基づき、この翻訳作品を書くことになったのである。

清朝史料によると、イスカンドル(伊斯堪達爾)は、いわゆるトゥルファン(吐魯番)郡王家の初代エミン・ホージャ(額敏和卓)の子であり、1779年に第3代のトゥルファン郡王となったのち、1788年にカシュガルのハーキム・ベグ(阿奇木伯克)職を併任し、1811年に死去した [佐口 1986: 174-176; ジャリロフほか 2008: 174, 注 408]<sup>(8)</sup>。イスカンドルの長子であるユヌス(玉努斯)は父死去の際に王爵を継承して第4代郡王となり、カシュガルのハーキム・ベグに任じられたが、コーカンド・ハーン国との交渉で罪を問われて1814年に郡王爵をとりあげられた [ジャリロフほか 2008: 176, 注 410, 411; 佐口 1963: 660, 注 115; 佐口 1986: 178]<sup>(9)</sup>。イスカンドルがカシュガルのハーキム・ベグに在任した期間は1788-1811年であり、その子ユヌスの同職在任期間は1811-1814年である [河野 2013: 31-32]。

以上のようにムハンマド・サーディク・カシュガリーは『タズキラ・イ・ホージャガーン』と『課題と信条の精髓』のそれぞれの序文においてカシュガルのハーキム、ウスマーン(在任1778-1788年)を称賛している。そしてイスカンドル(カシュガルのハーキム・ベグ職在任期間1788-1811年)またはその子ユヌス(カシュガルのハーキム・ベグ職在任期間1811-1814年)の命令ないし依頼により、『ラシードの歴史』をチャガタイ語に翻訳した。つまり、ムハンマド・サーディク・カシュガリーは18世紀の末から19世紀の初めにかけて、カシュガルにおいて著述にはげんでいたと考えられる。

## (2) 書名と写本

本書の書名(タイトル)は写本により違いが見られる。まず『タズキラ・イ・ホージャガーン』あるいは *Tadhkirat al-Jahān* (『タズキラ・アルジャハーン』) という名称が一部の写本群の序文に見える。筆者澤田はそれら6写本をBグループ写本と名付けている。それに対して別の写本グループの序文では *Tadhkira-i 'azīzān* (『尊師たちの伝記』) という書名が見られる。筆者はそれら10写本をAグループ写本と名付けている。両グループ写本の叙述内容は基本的には同じであるが、Aグループ写本はBグループ写本よりも飾り言葉のような表現や修辞をこらした文章などがかなり多く、異なったヴァージョンと考えられる [Sawada 2010; 澤田 2012]。

(8) イスカンドルのカシュガル統治について『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編に記述があり、新免康氏により訳注がなされている [ジャリロフほか 2008: 174-176]。

(9) ユヌスの事績について『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編に記述があり、新免康氏により訳注がなされている [ジャリロフほか 2008: 176-177]。

筆者が日本語訳したテキストは、以下のBグループ写本を底本と対照写本にしたものである。

底 本：ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支所（2007年から東洋写本研究）(Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk) D126写本

対照写本：Institut de France, ms. 3357写本、British Library, Or. 5338写本、British Library, Or. 9660写本、British Library, Or. 9662写本

### (3) 構成と内容

『タズキラ・イ・ホージャガーン』では序文のあとに、「物語の章。聞かなければならない」(Faṣl-i dāstān. Ishitmāk kerāk.) または、それに類似する表現で内容の区切りが示されていくので、その表現を章の区切り、ないし章の題目とみなして構成を考え整理した(別表『タズキラ・イ・ホージャガーン』の構成と内容参照)。全部で34の章からなり、各章の内容は筆者が要約したものである。形式的な特徴として章の長さの不均衡を指摘することができる。最も長い章は、第17章の「物語の章。カシュガルについて聞かなければならない」であり、78ページから101ページまでで、ページ数は23ページに及ぶ。最も短い章は、6、10、13、27の四つの章であり、わずか2ページにすぎない。全体として、きわめてアンバランスなページの配分になっている。そして、このような不均衡は、歴代の指導者であったホージャたちを扱う章の数にもあらわれている(別表参照)。

## 3. 『タズキラ・イ・ホージャガーン』における主要人物とその活動

### (1) カシュガル・ホージャ家の系図と二党派の対立

カシュガル・ホージャ家の主要人物の血統<sup>(10)</sup>を図示すれば次のようになる。この図ではホージャやホージャム(khwājam / khōjam、「我がホージャ」の意)という敬称、愛称は省いている。また、一部の人物については、他の史料から分かる没年を付記した。

カシュガル・ホージャ家の成員は、先述したように、中央アジア、サマルカンドにおける

<sup>(10)</sup> カシュガル・ホージャ家の系図はすでに先行研究で示されているが、イスハーク派のシュアイブ、ダーニヤール兄弟の父の名前については、疑問点が残されている。『タズキラ・イ・ホージャガーン』の序文に載せられた血統(外形的系譜)によると、ホージャ・ダーニヤールはホージャ・アブド・アッラーの子であるが、同書の別の箇所では、ホージャ・ダーニヤールとホージャ・シュアイブはホージャ・ウバイド・アッラーの子となっている[澤田2014: 67, 86]。[Shaw 1897: 11; Hartmann 1905: 341]所載の系図では、ホージャ・ダーニヤールとホージャ・シュアイブの父はホージャ・ウバイド・アッラーであるが、この兄弟の父をホージャ・ウバイド・アッラーではなく、Khwāja Muḥammad ‘Abdullāhとする系図も提起されている[Brophy 2008/2009: 28]。ウバイド(‘Ubayd)とアブド(‘Abd)のアラビア文字での綴りは一字違うだけであるので、諸写本間の相違を綿密に検討する必要がある。ここでは[Shaw 1897: 11; Hartmann 1905: 341]の系図に従っておく。



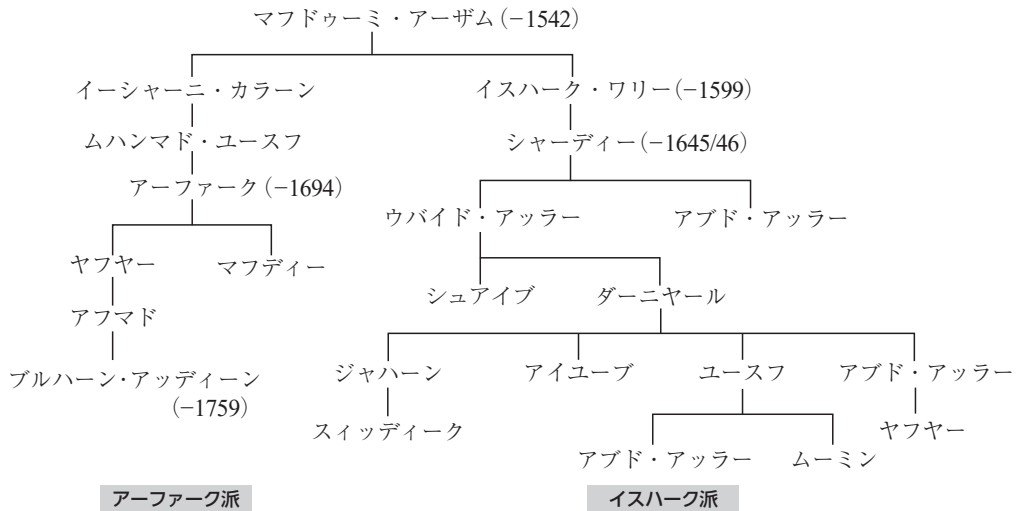


図 カシュガル・ホージャ家の系図

ナクシュバンディー教団の有名な指導者マフドゥーミ・アーザムの子孫であり、16世紀後半からタリム盆地に進出した。ただし、かれらは二つの党派を形成しながら宗教的な基盤を固めていった。マフドゥーミ・アーザムの第一夫人の第一子であるイーシャーニ・カラーンの子孫はアーファーク派あるいはイーシャーニーヤ派と呼ばれ、その異母兄弟のイスハーク・ワリーの子孫はイスハーク派と称し、この二党派はタリム盆地西部において対立し、カシュガル・ホージャ家として一つにまとまって活動していたわけではなかった。また、カシュガル・ホージャ家という表現も、『タズキラ・イ・ホージャガーン』をはじめ関係の史料に出てくるわけではなく、研究者によって用いられている呼称である。

この二党派が対立した背景あるいは原因として考えられる相違点は、道統、すなわち教導権の継承(師匠と弟子の関係)と、墓廟(拠点)の違いである。まず、道統の違いを見ておこう。マフドゥーミ・アーザムの最も著名な弟子は、ホージャ・イスラーム・ジュイバーリー(1563年没)(以下、ジュイバーリーと略記する)とマウラーナー・ルトフ・アッラー・チュースティー(1572年没)(以下、チュースティーと略記する)であった[Babadzhanov 1998a: 69]。アーファーク派は前者ジュイバーリーを、イスハーク派は後者チュースティーを経由してマフドゥーミ・アーザムから道統を受け継いでいる。すなわち『タズキラ・イ・ホージャガーン』によると、アーファーク派の始祖とみなされるイーシャーニ・カラーン(ホージャ・ムハンマド・エミーン)は、ジュイバーリーから系譜(nisbat)を受け継いだ[澤田 2014: 74-75]。それに対して、イーシャーニ・カラーンの異母弟でイスハーク派の名祖となるイスハーク・ワリーは、チュースティーから系譜を受け継いだのである[澤田 2014: 73-74]。

ババジャーノフ氏らの先行研究によれば、この著名な弟子二人、ジュイバーリーとチュース



ステイーは師匠のマフドゥーミ・アーザムが1542年に亡くなると、教団指導権の後継をめぐる激しく対立し、教団の事実上の分裂につながった。そして、チュースティーはシャイバーン朝のタシュケントの支配者バラク・ハーン(ナウルーズ・アフマド)と緊密な接触を維持し、他方ジュイバーリーは、バラク・ハーンとマワランナフルにおける王座をめぐる争ったアブド・アッラー2世を全面的に支持した。アブド・アッラー2世がその争いに勝った結果、ジュイバーリーの影響力は強化され地理的に拡大したが、教団の一本化にはならず、チュースティーの支持者たちはマワランナフルの周辺地域(タシュケント、フェルガナ、ヒサル)で20世紀初頭にいたるまで活動を続けたという。そして、ジュイバーリーはアブド・アッラー2世が1557年にブハラを獲得するのに協力し、同市西南部のジュイバール地区を拠点とするジュイバール・ホージャ家と称される一族の始祖となった[Babadzhanov 1998b: 65-66; Babajanov 1999: 258, 261; Babadzhanov & Szuppe 2001: 37-37; 磯貝 2005: 245]。このようなジュイバーリー、チュースティー両勢力の宗教的で政治的な抗争がアフアーク派とイスハーク派の対立に大きな影を落とすと考えられる。

次に、二党派の墓廟ないし拠点の違いについて述べたい。『タズキラ・イ・ホージャガーン』によると、アフアーク派のホージャ・ムハンマド・ユースフはヤルカンドからの帰途イェンギ・ヒサールのトゥフルクという所で亡くなり、カシュガルから来たホージャ・アフアークがその遺体を持ち帰り、ヤグドゥ(Yāghdū)の地に埋葬した[澤田 2014: 85]。そして、ホージャ・アフアークも死後ヤグドゥという地に埋葬され、それ以後、人々はヤグドゥという本来の名を捨て、アツパク・ホージャ・マザール(阿帕克和加麻扎)と呼ぶことになった[Lyu 1987: 822; 劉 1985: 427]。これが、現今のカシュガル市中心から東北約5kmの地に威容を誇るアフアーク派一族の墓所、アツパク(アフアーク)・ホージャ廟[澤田 1999: 58-59]の起源である。この墓廟に信者が多く集まり活発な宗教活動を行っていた様子が、清朝征服直後に作成された史料に記録されている[佐口 1995: 64-71]ので、ホージャ・アフアーク埋葬以後アフアーク派の宗教施設として発展していったと考えられる<sup>(11)</sup>。

他方イスハーク派においては、イスハーク・ワリーの子ホージャ・シャーデーイが1645/46年に亡くなり<sup>(12)</sup>、モグール国の第10代君主アブド・アッラー・ハーンによりヤルカンド市街地のアルトゥン(Altun、「黄金」の意)という墓地に埋葬され、そのマザール(墓廟)

<sup>(11)</sup> 佐口透氏が引用する故J. Fletcher氏の未公開原稿によると、「アフアークの時代にイスハーク派(イスハーク派)が侵入してヤグドゥ[ヤグドゥ]の墓所に放火したことがあった」という。また同じく、「アフアークの時代よりのち、ヤグドゥのワクフ地は膨大なものとなり、種々の建物、特に主廟墓とその高い円屋根(グンベズ)、宿泊所、マシド、池、薔薇園、果樹園が設けられた」という[佐口 1995: 70-71, note 7]。

<sup>(12)</sup> ホージャ・シャーデーイ(ホージャ・ムハンマド・ヤフヤー)は1055年(西暦1645/46年)に逝去したと、『シャー・マフムードの歴史』に明記されているが[Akimushkin 1976: Persian text, 70]、その没年を1053年(西暦1643/44年)とする説も提起されている[劉、魏 1998: 157, 159; Brophy 2008/2009: 18]。

の傍らに40人収容の修道場(ハーンカーフ)が建てられた。以後、その孫2人と曾孫2人がアルトゥンに葬られたことも『タズキラ・イ・ホージャガーン』から確認され、ホージャ・シャーディーの曾孫ホージャ・ジャハーンによってアク・マドラサという学院も建てられた[澤田1996: 54-56]。元来アルトゥンはシャーディーが埋葬される以前からモグール国ハーン家の墓地であり<sup>(13)</sup>、そこへの埋葬はイスハーク派とモグール国君主との政治的な結びつきの結果であると考えられる<sup>(14)</sup>。

以上のことから、アーファーク派はカシュガルのヤグドゥ(現在のアバク・ホージャ廟の所在地)を、イスハーク派はヤルカンドのアルトゥンをそれぞれの宗教活動の主要拠点としていたとみなされる。

## (2) ホージャたちの活動

次に、カシュガル・ホージャ家の代表的なホージャたちの活動、特に政治的な行状について『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記述内容にしたがって見ていきたい<sup>(15)</sup>。

### ①ホージャ・イスハーク・ワリー

カシュガル・ホージャ家成員のなかで東トルキスタンに最初に足を踏み入れたのは、ホージャ・イスハーク・ワリーである。『タズキラ・イ・ホージャガーン』は第1章から第3章にわたって、彼の誕生から死去までの生涯を奇跡的なエピソードを交えて語っている。まず、神聖な資質を備えて誕生したことが父マフドゥーミ・アーザムの言葉を通じて表現され、幼年時からの言動にもそのカリスマ性が現われていることが暗示される。イスハーク・ワリーの神秘的能力の発揮された出来事が逸話として語られている、例えば、バルフに旅した時にその地の君主ピール・ムハンマドの王子が病気で死に瀕していたのを神への祈願で救ったという。また彼の祈願の結果として、カザーク(カザフ族)の地方において18の偶像寺院が壊れ、18万のカーフィル(不信仰者)がムスリムになったとされている<sup>(16)</sup>。このように『タズキラ・イ・ホージャガーン』は本文の劈頭においてホージャ・イスハーク・ワリーの神聖さや奇跡

<sup>(13)</sup> 初代のサイド・ハーン、その息子アブド・アルラティーフ・スルターン、第4代のムハンマド・ハーン、第5代のシュジャー・アッディーン・アフマド・ハーンなどハーン家成員のアルトゥンでの埋葬が確認される[澤田1996: 55-56]。アルトゥン墓地は「黄金の氏族」たるチングス・ハーン家の末裔にふさわしい名称である。

<sup>(14)</sup> モグール国の歴史書などによると、ホージャ・シャーディーはモグール国の第5代、第6代、第9代、第10代のハーンたちの即位に関与(援助)している。また、第6代、第10代のハーンたちの遠征軍にも同行している。このようにホージャ・シャーディーによりイスハーク派とモグール・ハーン家との強い政治的結びつきが形成された[澤田1996: 48-54]。小沼孝博氏は、ムハンマド・ハーンがヤルカンド南方の軟玉の産地 *Kān-i sang-i qash* (「玉石の鉱山」)をホージャ・シャーディー(ホージャ・ムハンマド・ヤフヤー)に引き渡したことを指摘している[Onuma 2018: 39-40, note 31]。

<sup>(15)</sup> ホージャたちが関わった個々の事象や年代などの事実関係について、本節の叙述が『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記述内容のみに限られていない場合のあることを予め断っておきたい。

<sup>(16)</sup> これはカザフ族ではなく、クルグズ(キルギズ)族の改宗を伝承したものである[澤田1995: 153-159]。

的な能力を強調することによりその子孫、イスハーク派ホージャたちの正統性を示しているのであろう。

さて、イスハーク・ワリーはモグール国の第3代君主アブド・アルカリーム・ハーンの招きによりカシュガルに来たものの、ハーンの厚意を得ることはなかった<sup>(17)</sup>。しかし、ハーンの弟ムハンマド・スルターンが彼に帰依した。アブド・アルカリーム・ハーンの死後、ムハンマド・スルターンが即位すると(在位 1591/92-1609/10年)、状況は改善したと思われる。『タズキラ・イ・ホージャガーン』はイスハーク・ワリーがヤルカンド、カシュガル、アクスに12年間滞在したと伝える。その後、イスハーク・ワリーはサマルカンドに帰り、そこで1599年に死去して埋葬された[澤田 1987: 70; 澤田 1996: 41-44]。

ホージャ・イスハークの活動は息子のホージャ・シャーディーによりヤルカンドにおいて受け継がれるが、不思議なことに『タズキラ・イ・ホージャガーン』はシャーディーの生涯についてごく簡単に触れているだけである。ただし注目されるのは、シャーディーがカシュガルにある自分に奉納された地所をアフアーク派(イーシャーニーヤ派)のホージャ・ムハンマド・ユースフに委ねたと『タズキラ・イ・ホージャガーン』が記していることである(第4章)。これが事実であるならば、イスハーク派、少なくともホージャ・シャーディーはカシュガルにおけるアフアーク派の活動を容認しており、時期は不明なものの、その時点で両派の対立はなかったということになる<sup>(18)</sup>。

## ②ホージャ・アフアーク

ホージャ・アフアークが父ホージャ・ムハンマド・ユースフとともにカシュガルに移住してくる。それはモグール国君主のアブド・アッラー・ハーン(在位 1638/39-1667年)の治世下のことであったが、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はその移住の詳しい経緯について全く語っていない<sup>(19)</sup>。ホージャ・アフアークは父とともに、アブド・アッラー・ハーンの子でカシュガルを治めていたヨルバルス・スルターンやカシュガルの住民に受け入れられたものの、次第にヤルカンドのイスハーク派との対立が生じてくる。その背景には、ホージャ・アフアークと姻戚関係を結び親密な間柄となったヨルバルス・スルターンが、父ア

<sup>(17)</sup> ブローフィ氏によれば、イスハーク・ワリーは994/1585-86年にまだバルフにあり、1580年代の終わりにヤルカンドに到来したという。さらに、マフドゥーミ・アーザムに精神的系譜の連なるホージャ・アブド・アルマンナーンが、イスハーク・ワリーの到来以前にアブド・アルカリーム・ハーンの宮廷で活動しており、ハーンにイスハーク・ワリーとの会見を拒ませたという[Brophy 2008/2009: 17, note 56]。

<sup>(18)</sup> アフアーク派のホージャ・ムハンマド・ユースフとイスハーク派との抗争については[濱田 1998: 108]で触れられている。

<sup>(19)</sup> ブローフィ氏の研究によると、ムハンマド・ユースフは、中国での滞在を含むであろう旅をしてからハミに落ち着き、そこで婚姻により、カラ・ハーン王家の子孫を称するカシュガル出のサイドの家系の一員になり、長子のアフアーク・ホージャを含む三子をもうけたという。そして、ムハンマド・ユースフは1640年頃、息子たちとともに移動してカシュガルに近い村に居を定めたという[Brophy 2008/2009: 17-18]。

ブド・アッラー・ハーンを退位に追い込むなどハーン家内に紛争を起こし、その内紛にセンゲなどオイラト、ジュンガル王国の指導者たちが介入してくるといふ政治状況があった<sup>(20)</sup>。

このような紛糾の果てにモグール国の君主となったアブド・アッラー・ハーンの弟イスマーイール・ハーン(在位 1670-1680年)は、ホージャ・アフアークをカシュガルから追放する<sup>(21)</sup>。追放されたホージャ・アフアークは、『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記述によれば、カシュミールを経てチーン王国(Čīn mulki)のジョー(Jō< JV)という所に行き、そこのバラモン(の師)からカルマク(の)ブシュド・ハーン[ジュンガル王国のガルダン・ボショクト・ハーン]への援助要請の手紙を書いてもらい、イリに持って行ったという。ジョーはチベットのラサを指していると考えられる。その手紙の要請に基づいて、ガルダンのジュンガル王国軍はカシュガル、ヤルカンドを攻略してアフアークを王座(takht)に就け、イスマーイール・ハーンをイリに連行する。先に述べたように、先行研究では1680年のこととされている。以後モグール・ハーン家王族の活動は散発的に見られるものの<sup>(22)</sup>、実質的には、ここにモグール国は滅亡したと考えてよかろう。

アフアークによる統治は、一時中断はあるものの、1694年に死去するまで続いた。しかし、アフアークの死後、その長男のヤフヤーと異母弟マフディーの母との対立抗争が生じ、ヤフヤーとマフディーの母が相次いで殺害されるという事態におちいり、不穏な状況が続く。

### ③ホージャ・ダーニヤール

ホージャ・アフアークの統治期にイスハーク派のホージャたちはヤルカンドから追われていたが、サマルカンドに難を避けていたホージャ・ダーニヤール(ホージャ・イスハーク・ワリーの曾孫)がフェルガナ盆地のフジャンドでの活動をへてヤルカンドに戻ってくる。彼はホージャの座(khōjaliq masnadi)に就き、さらにその後、ヤルカンドの統治の王座(takht-i salṭanat)に就く。しかし、カシュガルのアフアーク派の勢力との対立はクルグズ族やカザフ族を巻き込んで、戦いにまで発展した。恐らくそのような混乱状態を解消して支配を安定させるためにカシュガルとヤルカンドに進軍したジュンガル王国軍は、ホージャ・ダーニヤールをアフアーク派のホージャ・アフマドとともに連行する。その結果、ホージャ・ダー

<sup>(20)</sup> アフアークとヨルバルスの姻戚関係やヤルカンドのハーン位をめぐる騒乱については[Brophy 2008/2009: 17-18]を参照。

<sup>(21)</sup> 濱田正美氏によれば、イスマーイール・ハーンに追放されたアフアークは、「1671/72年に西寧へと向かった。途中チベットを経由して援助を求めたともいわれている」[濱田 1998: 108]。ブローフィ氏は、アフアークが青海、甘肅に滞在したことを確認し、さらにトゥルファンにおいてモグール・ハーン家のアブド・アッラシード(イスマーイール・ハーンの甥)と結びつたことの重要性を指摘する[Brophy 2008/2009: 21-22]。

<sup>(22)</sup> イスマーイールを退位させイリに連れ去ったガルダンは、アブド・アッラシードをヤルカンドで傀儡のハーンに立てた。その後、アブド・アッラシードはイリに拉致され、1696年ガルダンは康熙帝に敗北した際に清軍に降った。アブド・アッラシードの後にはその兄弟のムハンマド・アミンがヤルカンドにおいてハーンに推戴されたが、1692年にアフアークの与党によって殺害された[濱田 1998: 109]。

ニヤールは7年間イリに住まわされる。

その後、カルマクの王族の娘から生まれたユースフ・ホージャムがダーニヤールの子であることが判明したのをきっかけにして、コンタージ〔コンタイジ、ジューンガル王国君主ツェワラプタン、在位1694-1727年〕から四つの城市（ヤルカンド、カシュガル、アクス、ホタン）の王権（pādīshāhliq）がホージャ・ダーニヤールに与えられる。ホージャ・ダーニヤールはヤルカンドの統治の王座に就き、カシュガル、アクス、ホタンの各ハーキムにも命令を出して統治し、カルマクに税を納めていた。そして、7年がこのように経った時、コンタージ、すなわちツェワラプタンが毒殺されるという事件が起こり、その継承争いを処理した息子のガルダン・チェリン〔ガルダンツェリン、在位1727-1745年〕が即位するが、その後、ホージャ・ダーニヤールが死去し、アルトゥンに埋葬された。

#### ④ユースフ・ホージャム

ダーニヤールの死後、カルマクはその4人の息子に上記4城市の王権を認めるが、ダーニヤールの第三子でカシュガルの統治を認められたユースフ・ホージャムは、ジューンガル王国の君主の交代にともなうイリにおける混乱を利用し、カシュガルにおいてカルマクからの独立をはかる。ユースフ・ホージャムはカシュガルの城壁を強化して武器を準備するだけでなく、フェルガナ盆地のアンディジャンに使者を送り、諸州のハーキム、クルグズの首領などに援軍を求める。しかし、その後、ユースフは重篤な病状となり、カシュガルを2人の息子に任せ、ヤルカンドに移り、そこで死去した。

#### ⑤ホージャ・ジャハーン

一方、ダーニヤールの第一子であるホージャ・ジャハーンは、父の死後ヤルカンドを統治したが、そのハーキムのガーズイー・ベグに一時軟禁されるなど、ヤルカンド内での陰謀に苦慮する。このようなヤルカンド内での陰謀や裏切りの背景には、清朝の軍隊や一部のカルマクの援助を得たカシュガル・ホージャ家アーファーク派の活動があった。清朝軍のジューンガル王国征服とそれにとともなうカルマク分裂の時に、アーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーンはカルマクでの捕囚から解放され、カルマク、清朝の軍勢とともに、タリム盆地のアクス方面に進出していた。つまり、イスハーク派からタリム盆地西半部の統治権を奪うための行動であった。

このような動きに対し、ホージャ・ジャハーンの側はアーファーク派のホージャ・ブルハーン・アッディーン、カルマク、清朝の軍勢に対しウシュ、アクス方面にヤルカンド軍を派遣するが、敗北を喫する。ホージャ・ブルハーン・アッディーン側にカシュガルを奪われたユースフ・ホージャムの2子はヤルカンドに逃げ、ホージャ・ジャハーンと合流する。ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の軍勢はウシュ、カシュガルで勝利を取めたのち、ヤルカンドを包囲攻撃するという局面にいたる。

結局、ホージャ・ジャハーンは、ハーキムのガーズイー・ベグの謀略などにより戦場で敗れたイスハーク派一族とともにヤルカンド城市を捨てて逃走するが、途中で捕らえられる。『タズキラ・イ・ホージャガーン』はこのようなイスハーク派ホージャたちのヤルカンドからの悲惨な逃亡と捕縛についての叙述で終わる。このイスハーク派勢力の最終的敗退の時期は『タズキラ・イ・ホージャガーン』に示されていないが、先述したように、1755年の終わりか1756年の初頭と考えられる。

## おわりに

以上のように『タズキラ・イ・ホージャガーン』はカシュガル・ホージャ家成員の伝記の体裁をとりながら、16世紀後半から18世紀の半ばまでのタリム盆地西半部で生じた政治的事柄について詳しく伝えている。それでは、聖者伝である『タズキラ・イ・ホージャガーン』が何故このように歴史書としての性格をも併せ持つことになったのであろうか。

『タズキラ・イ・ホージャガーン』の主眼は、その序文から分かるように、あくまでもイスハーク派ホージャたちの功績を語ることであった。しかし、ホージャ・アーファークをはじめアーファーク派のホージャたちの活動についても叙述がおよんでいる。これは、イスハーク派の歴代ホージャたちの事績を時系列にそって綴るためには、アーファーク派のホージャたちの活動にも言及する必要があるためであろう。特に、カルマク、ジュンガル王国の支配下に置かれるようになった経緯は、ホージャ・アーファークの行動を抜きにして語ることはできない。また最終的なイスハーク派の悲劇的な終焉も、アーファーク派のカルマクや清朝との結びつきを説明せねば理解できない。

しかしながら、そのようなアーファーク派ホージャについての叙述において同派に対する非難めいた言辞が見当たらないことにも注目すべきであろう。また、アーファーク派との対立抗争を本格化させたと考えられるホージャ・シャーディーの事績に、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はほとんど触れていない。著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーはイスハーク派とアーファーク派の対立抗争の実情に触れないよう配慮しているかに見える。

そして現実上、ホージャたちの活動の重点が宗教的なものから政治的なものに移っていったことも『タズキラ・イ・ホージャガーン』の性格を左右したであろう。イスハーク派はモグール国ハーン家との関係を深めることでその宗教的基盤を強化したと考えられるが、対照的にホージャ・アーファークはモグール国から追放されてカルマクと結びついた。このようなホージャたちの政治的な役割は、モグール国の滅亡後に特に強まったはずである。モンゴル帝国崩壊後も尊重されていたチンギス・ハーンの男系子孫による統治という原則(チンギス統原理)が失われていく転機において、新たな統合の原理が求められたと考えられる。そして、



ホージャ家以外にジューンガル王国の宗主権下においてタリム盆地西半部のオアシス地域の政治を広域的に担当できる勢力はなかった。つまり、ホージャに宗教指導者としてよりも政治指導者としての役割が強く求められ、ホージャもその役割を果たしたのである。そして、異教徒(チベット仏教徒)が君主であるカルマク、ジューンガル王国の宗主権下にあったことが、カシュガル・ホージャ家にムスリム指導者の統治という意識を強める結果になったのではないと思われる。著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーは、このようなホージャ家自体の政治化の現実を語らざるを得なかったのであろう。

表 『タズキラ・イ・ホージャガーン』の構成と内容

章の 仮番号 等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
序文		神への賛辞。預言者ムハンマドの称賛。本書執筆の経緯。預言者ムハンマドからホージャ・ジャハーン(ホージャ・ヤークーブ)に至る血統。 p. 2 / fol. 1b ~ p. 8 / fol. 4b
1	物語の章。 聞かなければならない。	マフドゥーミ・アーザムの妻子。子のホージャ・イスハーク・ワリーの誕生、成長、バルフへの旅。 p. 9 / fol. 5a ~ p. 15 / fol. 8a
2	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・イスハーク・ワリーの道統。カザークの地方における布教。カシュガルへの招聘。アブド・アルカリーム・ハーンとムハンマド・スルターンの対立。 p. 15 / fol. 8a ~ p. 19 / fol. 10a
3	〔物語の〕章。 知らなければならぬ。	ホージャ・イスハーク・ワリーのヤルカンド、カシュガル、アクスにおける12年の滞在。プハラからドストゥム・スルターン軍のカシュガル攻撃。ホージャ・イスハーク・ワリーの死去とサマルカンドでの埋葬。 p. 19 / fol. 10a ~ p. 22 / fol. 11b
4	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・イスハーク・ワリーの3子、特にホージャ・シャーディーの教導の位就任(ヤルカンド)。イーシャーニーヤ派のホージャ・ムハンマド・ユースフ、ホージャ・アーファーク父子がカシュガルへ移住。ホージャ・シャーディーの死去と埋葬。ホージャ・ムハンマド・ユースフの死去と埋葬。イスマーイール・ハーンによってホージャ・アーファークがカシュガルから追放される。ホージャ・シャーディーの子、ホージャ・ウバイド・アッラーが教導権を持つが、死去。 p. 22 / fol. 11b ~ p. 28 / fol. 14b
5	物語の章。 聞かなければならない。	カシュガルから追放されたホージャ・アーファークがジョーでのバラモンの師たちと出会い、その仲介でカルマクのブシュド・ハーン〔ジューンガル王国君主のガルダン・ボショクト・ハーン〕の援助を得る。ブシュド・ハーンの軍がカシュガル、ヤルカンドを攻略してアーファークを王座に就ける。イスマーイール・ハーンはイラ〔イリ〕に連行される。 p. 28 / fol. 14b ~ p. 30 / fol. 15b



章の 仮番号 等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
6	物語の章。 聞かなければならない。	カルマクへの納税。ムハンマド・エミン・ハーン(イスマール・ハーンの子)が王座に就けられる。ムハンマド・エミン・ハーンがイラの山で多数のカルマクを捕虜とする。同ハーンの子ハニム・パーディシャーがホージャ・アフアークに嫁ぐ。同ハーンの子の殉教。アフアークが再び王座に就く。  p. 30 / fol. 15b ~ p. 31 / fol. 16a
7	物語の章。 この2人のマフドゥーム ザーダ、すなわち、ホー ジャ・シュアィブ・ホー ジャムとダーニヤール・ ホージャムについて聞か なければならぬ。	ホージャ・シャーディーの2人の孫、シュアィブとダーニヤールがカシュミールに避難。ハーン寄進の土地からの収益とアルトゥン・マザール。スーフィー・ディーヴァーナによるシュアィブの殺害。ダーニヤールがサマルカンドに行き、高祖父マフドゥーム・アーザムの墓と曾祖父イスハーク・ワリーの墓に詣で、フジャンドで首長となる。ホージャ・ヤークーブ(別名ホージャ・ジャハーンの由来)、フジャンドで誕生。  p. 31 / fol. 16a ~ p. 36 / fol. 18b
8	物語の章。 ホージャ・アフアーク・アズィズ猊下について聞かなければならない。	ヤルカンドの統治の王座に坐すアフアークとハニム・パーディシャーの息子ホージャ・マフディーについて。アフアークの逝去、カシュガルに埋葬。ハニム・パーディシャーがホージャ・マフディーとともにヤルカンドにおいて、アフアークの長男ホージャ・ヤフヤー(別名ハーン・ホージャム)がカシュガルにおいて統治の王座に確乎となる。ヤルカンドの最上位の学者ミールザー・バラト・アーホンドがディーヴァーナたちにより殉教。ホージャ・ヤフヤーの殉教。ホージャ・ヤフヤーの3人の子のうち2人が殉教。1子ホージャ・アフマドがカシュガル北方のトヨシュク山に避難。ハニム・パーディシャーがホージャ・マフディーをハーンに推戴する。ハニム・パーディシャーがディーヴァーナたちにより殺害される。  p. 36 / fol. 18b ~ p. 39 / fol. 20a
9	物語の章。 聞かなければならない。	ムハンマド・エミン・ハーンの子アクバシュ・ハーンがヤルカンドに来て、千人のディーヴァーナを捕らえ殺す。カシュガルの人びとがトヨシュク山からホージャ・アフマドを連れてきてハーンに推戴する。ホージャ・ダーニヤールがフジャンドからカシュガルを経てヤルカンドに来て、ホージャの座に坐る。ホージャ・マフディーがヒンドゥースターンに向かう。カシュガルの人びとがクルグズとともにヤルカンドを攻撃。カザークのハーシム・スルターンがヤルカンドに連れてこられハーンに推戴される。カシュガル側のクルグズがヤルカンド側に敗北。ハーシム・スルターンが退去し、ダーニヤールがヤルカンドの統治の王座に就く。  p. 39 / fol. 20a ~ p. 43 / fol. 22a
10	物語の章。 イラ(イリ)について 聞かなければならない。	カルマクがカシュガルを経てヤルカンドに進軍。ホージャ・ダーニヤールは戦わず、カルマクに服従。カルマクはカシュガルでホージャ・アフマドを捕らえ、ダーニヤールとともに連れ去る。以後7年間ダーニヤールはイラに、アフマドはイリ川上流部のエレン・カブルガに住まわされる。  p. 43 / fol. 22a ~ p. 44 / fol. 22b

章の 仮番号 等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
11	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ダーニヤールの息子ユースフ・ホージャの出自(カルマク の王族の娘が母)。コンタージ[コンタイジ、ツェワンラブタン]がホー ジャ・ダーニヤールに四つの城市の王権を与える。  p. 44 / fol. 22b ~ p. 48 / fol. 24b
12	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ダーニヤールがヤルカンドに戻り、統治の王座に就き、 カシュガル、アクス、ホタンのハーキムを命令下におく。カルマク への貢納。コンタージの死去とガルダン・チェリン[ツェリン]の即位。 ホージャ・ダーニヤールの死去、アルトゥンに埋葬。カルマクがダー ニヤールの4人の息子たちに四つの城市の王権を与える(第一子の ジャハーンにヤルカンド、第三子のユースフにカシュガル、第二子 のアイユーブにアクス、第五子のアブド・アッラーにホタン)。ホー ジャ・ジャハーンのヤルカンドにおける生活。ホージャ・ジャハー ンがクトブ(樞軸)になること。ホージャ・ジャハーンの息子スイッ ディークについて。殉教の重要性について。ホージャ・ダーニヤール の第四子ハームーシュのイラにおける死去とヤルカンドのアル トゥンへの埋葬。  p. 48 / fol. 24b ~ p. 65 / fol. 33a
13	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・アブド・アッラーとその夫人、4人の息子の列挙。ホージャ・ アブド・アッラー、アクスで死去、アルトゥンに埋葬。ヤルカンド、 ホタン、アクス、ウチュ、カシュガルの各ハーキムの列挙。  p. 65 / fol. 33a ~ p. 66 / fol. 33b
14	物語の章。 聞かなければならない。	ユースフ・ホージャムの人柄。イラへの往来。ユースフはカルマク の王が替わりイラが混乱しているのを利用して、嘘の口実(クルグズ のカシュガル攻撃)を設けて、先ず息子のアブド・アッラーをイラか らカシュガルに戻らせ、次いで自らもカシュガルに戻る。ユースフ はムザト[ムザルト峠]でウチュのハーキム、ホージャ・スィー・ベ グに遭遇する。  p. 66 / fol. 33b ~ p. 74 / fol. 37b
15	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・スィー・ベグはユースフ・ホージャムがカルマクへの服従 から脱しようとしていると疑い、カルマクの王ダバチ[ダワチ]に、ユー スフをイラに戻らせるよう進言する。ダバチの命令によりダンジン・ ジャイサンがユースフを追うが追い付けず、アクスに行き、そこのハー キム、アブド・ワッハーブ・ベグと会い、イラに戻るようにとの手紙 をユースフに送る。ユースフは足の病を理由にイラに行くことを拒む 一方、カシュガルの城壁を強化し武器を準備するなど、カルマクとの 戦いに備える。  p. 74 / fol. 37b ~ p. 76 / fol. 38b

章の 仮番号 等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
16	物語の章。 イラについて聞かなければならない。	カルマクの王、ガルダン・チェリン[ガルダン・ツェリン]の没後、息子のアジャンが王座に就く。もう1人の息子、ラマ・タージー [ラマ・ダルジャ] がアジャンから王座を奪う。ガルダン・チェリンの姉妹の子、アムルサナーとダバチがラマ・タージーを攻撃して殺す。ダバチが王となる。ダバチに敗れたアムルサナーは北京に行き、ハーン[乾隆帝]に兵を求める。アムルサナーは千の兵を与えられ、サルン・ジャン・ジュンとともに進軍する。ダバチはアムルサナーを恐れて、カシュガルには兵を送らずユースフ・ホージャムを戻させたという。 p. 76 / fol. 38b ~ p. 78 / fol. 39b
17	物語の章。 カシュガルについて聞かなければならない。	カシュガルのユースフ・ホージャムに対する、カシュガル、ウチュ、アクス等に拠るベグ(豪族)たちの行動、とりわけ、カルマクに内通するベグたちの陰謀、カシュガルのイシク・アガ、フダー・ヤール・ベグの処刑。カルマクの使者たちは武装したユースフの勢力に圧倒され、カシュガルをあきらめてヤルカンドに向かう。ヤルカンドのハーキム、ガーズィー・ベグがカルマクの使者たちと策略をめぐらし、ユースフの長兄ホージャ・ジャハーンを監禁する。ホージャ・ジャハーンの子スィッディーク・ホージャムは父の異変を知り、ヤルカンドからホタンに向かうとともに、カシュガルにいる叔父のユースフに事態を知らせる。スィッディークはホタンにおいてガーズィー・ベグの息子がホタンのハーキムであるウマル・ベグとその一族を捕まえ、ホタンの軍勢を率いてクルグズ(キルギズ)の兵とともにヤルカンドに向かう。 p. 78 / fol. 39b ~ p. 101 / fol. 51a
18	物語の章。 ムハンマディエー・ミーラーフルについて聞かなければならない。	カシュガルのユースフ・ホージャムはムハンマディエー・ミーラーフルにより、ガーズィー・ベグにその愚行を非難する手紙を送り、ホージャ・ジャハーンに危害を加えないよう警告する。またカシュガルのハーキムでホタン出身のフシュ・キフェク・ベグも手紙を送り、悪行をやめてホージャ・ジャハーンを統治の王座に坐らせることを求める。ホタンの親族を捕虜にされたガーズィー・ベグは、結局、ホージャ・ジャハーンに罪の許しを乞うことにする。 p. 101 / fol. 51a ~ p. 105 / fol. 53a
19	物語の章。 ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下について聞かなければならない。	ユースフ・ホージャムはカシュガルにおいて人々を鼓舞してカルマクから独立する動きを進める。そのムスリム軍は交易に来ていたカルマクを襲撃して追い払う。 p. 105 / fol. 53a ~ p. 108 / fol. 54b
20	物語の章。 聞かなければならない。	ホージャ・ジャハーンはガーズィー・ベグの罪を赦し、ヤルカンドの統治の王座に確乎となる。 p. 108 / fol. 54b ~ p. 115 / fol. 58a
21	物語の章。 ユースフ・ホージャム・パーディシャーについて聞かなければならない。	ユースフ・ホージャムはアンディジャーンに使者を送り、その諸州のハーキムたち、クルグズたちの首領(クバード・ミールザー)、ホージャ・ハサンの門弟たちにカーフィル(不信仰者)[カルマク]との戦いへの援助を求める。 p. 115 / fol. 58a ~ p. 117 / fol. 59a

章の 仮番号 等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
22	物語の章。 聞かなければならない。	<p>アクスのハーキム、アブド・ワッハーブ・ベグに捕らえられていたユースフ・ホージャムの夫人が救出され、カシュガルに来る。ユースフ・ホージャムは重篤な病状となり、カシュガルの統治を息子2人(アブド・アッラー、ムーミン)に任せ、父祖の眠る地、ヤルカンドへ移る。</p> <p>p. 117 / fol. 59a ~ p. 123 / fol. 62a</p>
23	物語の章。 イラの地について聞かなければならない。	<p>アムルサナーとシナの軍(清軍)の進撃を前に、ダバチはイラからウシュのほうへ逃れるが、そこのハーキム、ホージャ・スィー・ベグに捕縛され、清朝皇帝のもとに送られる。この混乱した状況のもと、アクスのハーキム、アブド・ワッハーブ・ベグと弟のホージャ・スィー・ベグの献策により、カルマクは長年監禁していたアーファーク派のホージャたちをカシュガル、ヤルカンドの征服のために利用する。すなわち、ホージャ・アーファークの孫ホージャ・アフマドの2子、ホージャ・ブルハーン・アッディーンとハーン・ホージャムをその戦列に加える。ハーン・ホージャムはイラに留め置かれたものの、ホージャ・ブルハーン・アッディーンはカルマクやシナなどの部隊を率い、アクスを経てウシュに入る。</p> <p>p. 123 / fol. 62a ~ p. 126 / fol. 63b</p>
24	物語の章。	<p>ヤルカンドからアクス、ウシュに軍を派遣することをホージャ・ジャハーンが許可する。その甥ホージャ・ヤフヤーが率いるヤルカンド軍はイェンギ・ヒサルを経てカシュガルに到る。</p> <p>p. 126 / fol. 63b ~ p. 129 / fol. 65a</p>
25	物語の章。 聞かなければならない。	<p>ヤルカンド軍の出発2日後にユースフ・ホージャムが逝去する。ホージャ・ヤフヤーはカシュガルで哀悼の意を示し、ホージャ・アブド・アッラー(ユースフ・ホージャムの子)がカシュガルの王座に就く。そして、ホージャ・ムーミン(ホージャ・アブド・アッラーの兄弟)がカシュガル軍を率いてウシュへの遠征に加わる。両軍は合流して、ホージャ・ブルハーン・アッディーンがいるウシュの城市に近づく。</p> <p>p. 129 / fol. 65a ~ p. 133 / fol. 67a</p>
26	物語の章。 ホージャ・ヤフヤー、下とホージャ・ムーミンについて聞かなければならない。	<p>ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の陣容(ベグたち・アーホンたち・スーフィーたちの名の列挙、トロムタイ大人と400人の中国人、ダンジン・ジャイサンと1000人のカルマク、タグリク)。ホージャ・ヤフヤーとホージャ・ムーミンの軍はホージャ・ブルハーン・アッディーンの軍勢と戦って敗れ、ヤフヤーはヤルカンドへ、ムーミンはカシュガルへ敗走。</p> <p>p. 133 / fol. 67a ~ p. 145 / fol. 73a</p>
27	物語の章。 聞かなければならない。	<p>ホージャ・ブルハーン・アッディーンは、アブド・ワッハーブ、ホージャ・スィー・ベグの助言に従い、まずカシュガルへの進軍を決める。</p> <p>p. 145 / fol. 73a ~ p. 146 / fol. 73b</p>

章の 仮番号 等	章題	主な内容
		D126写本の頁数 / 葉数
28	物語の章。 カシュガルについて聞 かなければならない。	カシュガルの人びとがホージャ・ブルハーン・アッディーン側に付きはじめる。ホージャ・アブド・アッラーは変心したアーホンのムッラー・マジードを殺し、ヤルカンドに向かう。ホージャ・ブルハーン・アッディーンがカシュガルに入り、統治の王座に坐る。クルグズのワバード・ミールザーがホージャ・ブルハーン・アッディーン側に付く。ホージャ・ブルハーン・アッディーン軍勢がヤルカンドに向かう。  p. 146 / fol. 73b ~ p. 153 / fol. 77a
29	物語の章。 ヤルカンドについて聞 かなければならない。	ホージャ・アブド・アッラーとホージャ・ムーミンがヤルカンドに入る。ホージャ・ブルハーン・アッディーン軍勢との戦いがヤルカンド城外で始まる。ホージャ・ブルハーン・アッディーン側の陣容(ベグ、アーホンなど人名の列挙)。ホージャ・ジャハーン側の陣容(人名の列挙)。ホージャ・ブルハーン・アッディーンからの使者がホージャ・ジャハーンに投降をうながすが書状を渡すが、投降は拒否される。  p. 153 / fol. 77a ~ p. 170 / fol. 85b
30	物語の章。	ホージャ・ジャハーンも使者をホージャ・ブルハーン・アッディーンのもとに送り、カーフィル(不信仰者) [カルマクと清軍] に対し、協力して戦うことを求めるが、拒否される。ホージャ・ブルハーン・アッディーンはヤルカンドのハーキム、ガーズィー・ベグを懐柔してヤルカンド城市を取ろうと考える。  p. 170 / fol. 85b ~ p. 177 / fol. 89a
31	物語の章。 ニヤーズ・ベグ・イシク・ アガについて聞かなけ ればならない。	ヤルカンドのイシク・アガ(ハーキムの副官)、ニヤーズ・ベグがホージャ・ブルハーン・アッディーン側の懐柔を受け、ヤルカンドの城壁に坑道を掘るも、発覚する。  p. 177 / fol. 89a ~ p. 180 / fol. 90b
32	物語の章。	ホージャ・ジャハーン側の高官、アシュール・コズ・ベグがホージャ・ブルハーン・アッディーンと内通し城壁を壊そうとするも、発覚する。  p. 180 / fol. 90b ~ p. 186 / fol. 93b
33	物語の章。 ホージャ・ブルハーン・ アッディーン・ホージャ ムについて聞かなけれ ばならない。	勇敢なイナーヤト・ホージャム(ホージャ・ジャハーンの娘婿)の戦死。ガーズィー・ベグがホージャ・ブルハーン・アッディーンに内通する。ヤルカンド城外での戦闘。ホージャ・ジャハーンたちはヤルカンド城市を出てザラフシャーン河の方に避難するが、クルグズたちが待ち伏せをしている。  p. 186 / fol. 93b ~ p. 199 / fol. 100a
34	物語の章。 ガーズィー〔・ベグ〕に ついて〔聞かなければな らない〕。	ホージャ・ブルハーン・アッディーンが、逃走したホージャ・ジャハーンたちを追い兵を發する。追手に対するホージャ・アブド・アッラーの奮戦。エルケ・ホージャム(ユースフ・ホージャムの子で、ホージャ・アブド・アッラーの弟)の殉教。ホージャ・ジャハーンたちが捕らえられ、ホージャ・ブルハーン・アッディーンのもとへ連れて行かれる。  p. 199 / fol. 100a ~ p. 219 / fol. 110a

## 参考文献

- 磯貝健一 2005 「ジュエイバル・ホージャ家」小松久男、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可、堀川徹(編)『中央ユーラシアを知る事典』東京：平凡社、245頁。
- 河野敦史 2013 「18～19世紀における回部王公とバク制に関する一考察：ハーキム・バク職への任用を中心に」『日本中央アジア学会報』第9号、19-48頁。
- 佐口透 1948 「東トルキスタン封建社会史序説：ホヂャ時代の一考察」『歴史学研究』134号、1-18頁。
- 1963 『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館。
- 1971 「トルキスタンの諸ハン国」『岩波講座 世界歴史 13 内陸アジア世界の展開 II 南アジア世界の展開』東京：岩波書店、43-71頁。
- 1986 『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。
- 1995 『新疆ムスリム研究』東京：吉川弘文館。
- 澤田稔 1987 「ホージャ・イスハークの宗教活動：特にカーシュガル・ハーン家との関係について」『西南アジア研究』第27号、57-74頁。
- 1995 「16世紀後半のキルギズ族とイスラーム」『帝塚山学院短期大学研究年報』第43号、149-176頁。
- 1996 「ホージャ家イスハーク派の形成：17世紀前半のタリム盆地西辺を中心に」『西南アジア研究』第45号、39-61頁。
- 1999 「タリム盆地周縁部イスラーム史跡調査報告」『帝塚山学院大学人間文化学部研究年報』創刊号、49-70頁。
- 2012 「『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本にみえる相違：書名と系譜について」『西南アジア研究』第76号、72-85頁。
- 2014～2018 「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注(1)～(8)」『富山大学人文学部紀要』第61号、59-86頁、第62号、89-118頁、第63号、33-57頁、第64号、81-106頁、第65号、21-44頁、第66号、55-82頁、第67号、31-60頁、第68号、27-43頁。
- ジャリロフ・アマンバク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直 2008 『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』東京：NIHUプログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点。
- 濱田正美 1998 「モグル・ウルスから新疆へ：東トルキスタンと明清王朝」『岩波講座 世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』東京：岩波書店、97-119頁。
- 2006 『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』京都：京都大学大学院文学研究科。
- 本田實信 1984 「イラン」『アジア歴史研究入門 第4巻 内陸アジア・西アジア』京都：同朋舎出版、593-662頁。

- 劉志霄 1985『維吾爾族歷史(上編)』北京：民族出版社。
- 劉正寅、魏良弢 1998『西域和卓家族研究』北京：中国社会科学出版社。
- 若松寛 1971「オイラート族の発展」『岩波講座 世界歴史 13 内陸アジア世界の展開 II 南アジア世界の展開』東京：岩波書店、73-101頁。
- Akimushkin, O. F. 1976. *Shakh-Makhmud ibn Mirza Fazil Churas, Khronika*, Moskva: Nauka.
- Babadzhanov, B. M. 1998a. “Makhdum-i A‘zam,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 1, Moskva: Izdatel’skaya firma Vostochnaya literatura RAN, pp. 69-70.
- 1998b. “Lutfallakh Chusti,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 1, Moskva: Izdatel’skaya firma Vostochnaya literatura RAN, pp. 65-66.
- Babajanov, Bakhtiyor. 1999. “Mawlānā Luṭfullāh Chūstī. An Outline of His Hagiography and Political Activity,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 149, pp. 245-270.
- Babadzhanov, B. M. & Szuppe, Mariya. 2001. “Dzhuibari,” in S. M. Prozorov (ed.), *Islam na territorii byvshei Rossiiskoi imperii. Entsiklopedicheskii slovar’*, Vypusk 3, Moskva: Izdatel’skaya firma Vostochnaya literatura RAN, pp. 36-38.
- Brophy, David. 2008/2009. “The Oirat in Eastern Turkistan and the Rise of Āfāq Khwāja,” Th. T. Allsen, P. B. Golden, R. K. Kovalev, A. P. Martinez (eds.), *Archivum Eurasiae Medii Aevi*, 16, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 5-28.
- Dunlop, D. M. 1986. “Bal‘amī,” in *The Encyclopaedia of Islam. New Edition. Vol. 1*, Leiden: E. J. Brill, pp. 984-985.
- Fletcher, Joseph. 1978. “Ch’ing Inner Asia c. 1800,” in *The Cambridge History of China*, Vol. 10, Late Ch’ing, 1800-1911, Part 1, London, New York, Melbourne: Cambridge University Press, pp. 35-106.
- Hartmann, Martin. 1905. “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag.
- Hofman, H. F. 1969. *Turkish Literature: A Bio-bibliographical Survey*, Section III, Part I, Vol. 4: K-N, Utrecht: Library of the University of Utrecht.
- Lyu Zishyaw. 1987. *Uyghur Tarikhi (Birinchi Qisim)*, Beyjing: Millätlär Näshriyati.
- Muḥammad Şādiq Kāshgharī. 1314 [1897]. *Zūbdeṭü’l-mesā’il ve’l-‘aqā’id*. Istanbul: Hajj ‘Abbās Aqa Maṭba‘ası.
- *Ta’rīkh-i Rashīdī Tarjamasī*, Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiiskoi Akademii nauk (Institut vostochnykh rukopisei Rossiiskoi Akademii nauk), Rukopis’ C569.
- Mullā Mūsā Sayrāmī. *Ta’rīkh-i Amniyya*, Bibliothèque Nationale, Collection Pelliot B 1740.



- Onuma Takahiro. 2018. "Political Power and Caravan Merchants at the Oasis Towns in Central Asia: The Case of Altishahr in the 17<sup>th</sup> and 18<sup>th</sup> Centuries," Onuma Takahiro, David Brophy, Shinmen Yasushi (eds.), *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations*, Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 33-57.
- Sawada Minoru. 2010. "Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq," James A. Millward, Shinmen Yasushi, Sugawara Jun (eds.), *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20 th Centuries*, Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 9-30.
- Shaw, Robert Barkley. 1897. "The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the *Tazkira-i-Khwājagān* of Muḥammad Ṣādiq Kashghari," edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, pp. i-vi, 1-67.
- Thum, Rian. 2018. "Moghul Relations with the Mughals: Economic, Political, and Cultural," Onuma Takahiro, David Brophy, Shinmen Yasushi (eds.), *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations*, Tokyo: The Toyo Bunko, pp. 9-31.

(富山大学人文学部)